

# KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 93 号 令和元年(2019) 11月20日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



コレクション展示室 桜ヶ丘銅鐸・銅戈

(写真：神戸市立博物館提供)

## 神戸市立博物館

神戸市立博物館は、昭和五十七年に旧外国人居留地に開館しました。市立南蛮美術館と考古館を統合した人文系の博物館です。建物の本館部分は、昭和十年に建設された横浜正金銀行神戸支店だったもので、国の登録有形文化財（建造物）です。

平成三十年二月から行われていた工事をこのほど終え、令和元年十一月二日にリニューアルオープンしました。歴史を感じさせる外観と内装が改善され、二階には古地図、びいどろ、美術作品などの所蔵資料を常設展示するコレクション展示室ができました。特に社会科の教科書でおなじみの、聖フランシスコ・ザビエル像と国宝 桜ヶ丘銅鐸・銅戈群は、専用の展示室でいつでも間近に見ることができるようになりました。

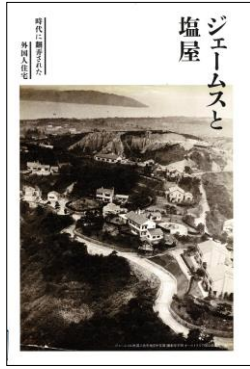
また、無料で入館できるようになった一階には、神戸の歴史展示室やミュージアムカフェ・ショップがあります。カフェには異人館「旧トムセン邸」の部材を使用した特別室もありますので、レトロでモダンな雰囲気味わいに立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

### ジェームスと塩屋―時代に翻弄された 外国人住宅 水島あかね編著「発行」

昭和初期、塩屋の丘陵に英国人実業家のE・W・ジェームスが、私財を投じて外国人専用的高级住宅地を開発した。施設を備えた塩屋カントリークラブを中心に住宅五十三棟が完成し、「外遊客誘致のための裏山開発」という彼の構想を実現する第一歩となった。

塩屋を愛したジェームスの生涯と、開発経緯から、日本軍やGHQによる接収、ジェームスの死後まで住宅地の変遷をたどる。

当時の写真に写る優雅に立ち並ぶ家々や海沿いの景色は良き時代を偲ばせる。主な資料は、後見人として尽力したハロルド・S・ウィリアムスのコレクションによる。



### 近代神戸の小学校建築史 川島智生 (関西学院大学出版会)

小学校が誕生した明治期から大正・昭和戦前期の鉄筋コンクリート造りの校舍までを、学校ごとに詳細に検証する。設計や建設に携わった建築家たちの経歴を精査することで、神戸の小学校建築の全体像を浮かび上がらせている。また、震災や震災による校舎の被災状況についても検証を加えている。

### 兵庫の酒がつなぐ30の物語―その土地に、米と人あり 白井操(笑顔の食卓)

料理研究家である著者が兵庫県内の三十の蔵元の当主を訪ね、蔵の歴史や酒の製法、こだわりなど、それぞれの蔵の物語をまとめた。また、兵庫県発祥の酒米の王様「山田錦」の生産関係者にも取材。彼らが細心の注意を払い栽培する兵庫県産は今も別格とされている。愛飲家・酒屋・飲食店の言葉、日本酒用語の解説、酒に合う料理のレシピもあり、様々な角度から兵庫の酒の魅力を伝えている。

### すてきな神戸がありました―この街と共に生きてきた私たちの記憶 神戸市婦人団体協議会・中央区連合婦人会著・発行

三宮や元町を発祥とする企業や商店、飲食店、歴史的スポットなど中央区の名店・名所を紹介する。創業者の声、古い写真を掲載してまとめられた店の歴史はそこに生きた人々の歴史でもある。映画館、焼豚、パン屋など、思い出を語った座談会には、神戸を知る人には納得の懐かしさが漂う。店や場所の選択には街で暮らした婦人会メンバーならではの目線が光る。

### 美しき愚かものたちのタブロー 原田マハ(文藝春秋)

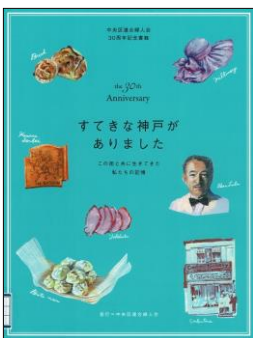
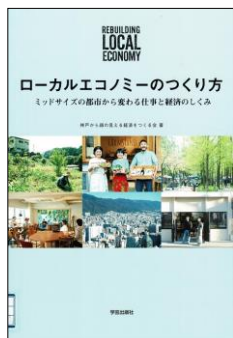
川崎造船所や神戸新聞社の社長を務めた松方幸次郎が、戦前に欧州で買い集めた美術品である松方コレクション。その一部は国立西洋美術館に所蔵されているが、戦後の一時期、敗戦国の賠償としてフランス政府に接収されていた。「日本の若者に本物の美術品を」という松方の想いを引き継いだ人々が、作品を守り日本に迎入れるまでの奔走を描く。緻密な取材に基づくフィクションである。

### ローカルエコノミーのつくり方―ミッドサイズの都市から変わる仕事と経済のしくみ 神戸から顔の見える経済をつくる会(学芸出版社)

本書で紹介されているのは神戸に住み、地元志向で創造的な仕事を行う人々の活動である。

市街地の公園に市内の農家と個人経営の食事業者が出店し、生産者と消費者が会話を楽しみながら交流するファーマーズマーケット、北区を拠点に茅葺古民家の保存をめざす職人チーム、六甲山の間伐材をビジネスにつなげる人など。

海と山に囲まれ、都市と農村が一体化している神戸ならではのスマールビジネスが、これからの経済のあり方を予見させる。

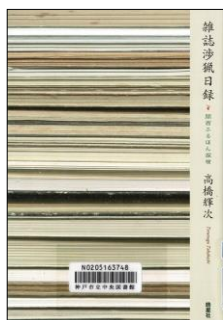


雑誌渉猟日録―関西ふるほん探検

高橋輝次 (皓星社)

古本好きの著者が、関西の古書店をまわって手に入れた雑誌や図録など様々な書物を紹介する。

詩の文芸誌『茉莉花』などとりあげ、詩人たちの逸話とともに詩を転載する。隠れた才能に光をあてたいと選ばれた数多くの詩に出会えるのが魅力である。俳人・岸百艸ひゃくそうが発行した愛書家むけの雑誌『書彩』に寄稿する神戸の文化人の顔ぶれからは古書店主であった百艸の人物が偲おもばれるという。書物から編者や挿絵画家など関わる人々の人物像までを読み取って、思いがけない出会いや発見を得た喜びを綴り、書物を探し求める愉しさを伝えてくれる。



アンフォゲッタブル―はじまりの街・神戸で生まれる絆 松宮宏 (徳間書店)

モトコー (元町高架通商店街)

に店を構えるところあるジャズ喫茶は、昔から多くのジャズ好きに愛されてきたが、立ち退きの危機が迫っていた。店を残すためには莫大な資金が必要だという。保険外交員や元潜水艦設計士など、ジャズがなければ出会わなかっただろう人々が、共にその壁に立ち向かう。実在する場所やミュージシャンが登場するので、まるでその場にいるかのような気持ち味が味わえる。

あなもん 戸川昌士 (Pヴァイン)

著者は神戸のJR元町駅近くにある短い商店街「穴門」に店を開く古書店主。本書は二〇〇九年から約一〇年間、神戸新聞に連載したコラム一―五編を集めたもの。

テーマは、書籍、雑誌、児童書漫画、ポスター、レコードなど。手塚治虫など超有名なものから、いわゆる「B級」まで昭和を彩った様々なモノたちが登場する。水木しげるの色紙の真贋を巡る文章からは作家や作品、モノたちに対する著者の深い思いが伺える。

II その他の新刊 II

震災復興研究序説―復興の人権思想と実際 出口俊一 (クリエイツかもがわ)

多井畑誌―千三百年の時を超えて 多井畑誌編集委員会編集 (多井畑ふれあいのまちづくり協議会)

PTAのトリセツ―保護者と校長の奮闘記 今関明子 福本靖 (世論社)

兵庫県金融150年史 兵庫県政150周年記念「兵庫県金融150年史」編纂会編集・発行

神戸 その17 あんな人こんな人

清水 誠 しみず・まこと 弘化2(1845)～明治32(1899)



(加藤豊氏提供)

清水誠は弘化2年、金沢に生まれました。明治3年、金沢藩の留学生としてフランスに赴き、工芸大学に学びました。在欧中、日本の輸入超過を憂う宮内次官吉井友実に嘆願され、マッチの製造技術の研究に取り組みます。帰国後の明治9年、東京本所に大工場を起ち上げ「新燧社」として本格的なマッチ生産を開始しました。自社のみならず、神戸の監獄内工場をはじめ多くの団体に製法の指導を行うなどその製造技術を広く公開し、各地にマッチ工場が増えていきました。明治11年には再渡欧して本場スウェーデンで安全マッチ製造を学び、さらには全国の唐物商を網羅した組合「開興商社」をつくって新燧社製マッチを販売させるなど国産マッチの普及に努め、明治13年、ついにマッチの輸入を防ぎ、輸出に転じさせたのです。



金星観測記念碑

国産マッチの開祖として、その後の神戸のマッチ工業発展\*に寄与した清水ですが、別のかたちで神戸にその名を残しています。明治7年12月9日、フランスの観測隊が金星の太陽面通過の現象を観測するため諏訪山にやって来ますが、フランス政府の要請で隊に同行し、日本人として初めて観測撮影を成功させているのです。諏訪山金星台にある観測記念碑には、彼の名も刻まれています。

\*本紙4p ランダムウォーク参照

参考文献『マッチ産業発達史』他



神戸と燐寸(マッチ)

非常時に頼りになるマッチ。その原理は簡単で、軸木(マッチ棒)の先についた薬品を、摩擦で発火させるつくりになっています。実はこの便利な商品には、神戸との深い関係がありました。

マッチの歴史は、英国で薬剤師のジョン・ウオーカーが、一八二七年に「ウオーカーマッチ」と呼ばれる黄リンを使用したマッチを発明し、販売したのがはじまりです。これが、実用に耐えうるマッチの元祖とされています。なお、現在一般に浸透しているものは、発火部を頭葉と側葉に分離した「安全マッチ」と呼ばれる製品ですが、これはリンの自然発火の危険性を避けるため、のちにスウェーデンで開発されたものでした。日本では一八三九年(天保十)に発明された、初の国産マッチ「ドンドロ付木」を皮切りに、兵庫県出身の蘭学者、川本幸民などがマッチの試作を行います。その後、一八七五年(明治八)に、フランスでマッチ

の製法を学んだ清水誠が試作に成功し、翌年、東京に「新燐社」を設立しました。これより、国内各地でマッチの製造が開始されることとなります。

一方、神戸で初めてマッチが製造されたのは、一八七七年(明治十)のことでした。『兵庫百年史』によれば、「兵庫監獄使役場の付属工場」での貿易五厘金を資金にした製造がはじまりで、次いで市中商人や士族なども生産に着手したようです。その後、本多義知による「明治社」や滝川辨三の「清燐社」などが設立され、続々と業界へ参入していきます。驚くことに、市内で製造が始まった翌年の一八七八年(明治十一)には、早くも生産されたマッチの一部が上海へと初輸出されていた。

ところが、全国的に増加するマッチ業者と安値競争の激化、粗悪品の流出などにより輸出量が減少し、段々と業界全体が輸出不振に陥ります。そこで、価格競争の防止のほか、国内初の商標法「商標条例」による商標登録、輸出前の製品チェックなど、業界人が信頼を回復するべく奮闘し、一八八七年(明治二十)には不振時代を脱却できました。

市内でマッチの製造に携わっていた業者の多くが、特にアジア方面への貿易において、絶大な力をもっていた華僑でした。

神戸のマッチ産業は、雨の少ない瀬戸内式気候、豊富な労働力、そして、当時日本一の貿易港であった神戸港に近いという好条件も揃い、非常に栄えました。『神戸貿易協会史』の「神戸港雑貨輸出入表」を見れば、一九〇二年(明治三十五)には約七百四十七万円の輸出であったマッチが、一九一八年(大正七)には約二千三百二十八万円と三倍以上の伸びを記録し、他の輸出製品を抑えて一位になっています。

また、大阪では黄リンマッチが、神戸では安全マッチが主に製造されていたことから、後に中毒問題で黄リンマッチが製造禁止になると、壊滅状態になった大阪をおさえて「マッチといえば神戸」といわれるようになりました。

第二次世界大戦後になると、神戸のマッチ産業は徐々に縮小していきます。生産の中心地も西の姫路や播磨地域へと移り、製造されるマッチの種類も、百貨店や飲食店・ホテルなどで配布する、色鮮やかな「広告マッチ」が主流になっていきました。

↓清燐社の「寝獅子」意匠



↓スウェーデン製マッチの意匠



加藤豊編『マッチラベルパラダイム』(木耳社)より

マッチ商標の第一号として、一八八五年(明治十八)の六月二十日に登録されたのが、清燐社のラベル「寝獅子」でした。台座上のライオンの姿をよく見るとスウェーデン製マッチの意匠によく似ていることがわかります。

清燐社を興した滝川氏は、マッチ産業の牽引役として多大な功績を残し、「燐寸王」と呼ばれました。彼は、婿養子の儀作とともに自社の職工の待遇改善に努めたほか、後の滝川中学校の校長となって教育に力を注ぐなど、ものづくり以外でも神戸市の発展に貢献しました。



滝川辨三

『故滝川先生追憶誌』より

参考文献:『日本のマッチ工業と瀧川儀作翁』『マッチラベル博物館』『兵庫県の発展を支えたマッチ産業』(『季刊ひょうご経済』No.106)他